「地域に『健康を守るために薬局は利用価値が高い』
と認識してもらうためには、
行政の事業に積極的に参画することが重要」
―― 富士市薬剤師会　廣中義樹さん

特集

地域薬剤師会の取り組み
――薬局薬剤師の存在をアピールせよ

**地域に根差した薬局の重要性が指摘される中、小規模薬局は資金やマンパワーの不足が障壁となり、
住民に対する新しいサービスの提供や健康関連の啓発活動など独自の取り組みが実施できないのが現状だ。
この問題を解消するのに大きな力となるのが地域薬剤師会のサポートだ。
住民のニーズに応えるため、各地の地域薬剤師会では会員薬局と連携しながら様々な取り組みを実施している。
今回は行政が展開する「うつ・自殺対策事業」に積極的に参画した薬剤師会と、
薬局薬剤師と住民との距離を縮めるためにお薬講演会を企画した薬剤師会の活動を通し、
地域薬剤師会の取り組みが地域の薬局にもたらした効果について探ってみる。**

「薬局が地域の中で重要な役割を果たすためには、
地域に開かれた事業を展開し、薬局が信頼できる
相談窓口であることを行政や住民に
認めてもらうことが大事」
―― 千葉市薬剤師会　古山陽一さん

事例02

古山陽一・川島一夫・笹部英士
（写真中央）（写真右）
千葉市薬剤師会
（千葉県千葉市）

「まちかどお薬講演会」を開催し地域住民との交流を持つことで薬局薬剤師への理解を深める

存在を知ってもらうために地域に開かれた事業を展開

千葉市薬剤師会（古山陽一会長、会員薬局数336軒、会員薬剤師数600人）では、2010年度より情報・広報委員会の事業の一つとして「まちかどお薬講演会」を実施している。これは、薬局の薬剤師がその地域の住民に向けて薬を中心とした健康・医療情報を提供し、日頃、住民が不安や心配に感じていることを薬剤師に直接相談できる場として定期的に開かれているものだ。

同薬剤師会では初年度に５回、そして２年目にあたる2011年度は３回の講演会を市内各地で開催してきた。いずれの回も平均20人以上の住民が参加し、多いときは40人もの聴衆が集まる、千葉市では人気の健康講演会に成長している。

そもそも、同講演会の計画が情報・広報委員会内で持ち上がったのは2008年のことだ。それまで会員重視の事業を行ってきたが、当時、副会長だった古山陽一さんの「薬局薬剤師の存在を知ってもらうためには地域に開かれた事業を展開し貢献することが大事だ」という考えの下、地域向けの新事業を立ち上げることになった。

そこで、どのような事業を行うのがよいのか内部で検討するとともに、古山さんは介護予防事業の協力などで普段から連携のあった千葉市に相談を持ちかけた。すると、「千葉市も後援するから、薬を中心とした啓発活動を、市民のためにぜひ企画してほしい」との要請があり、今回の事業が具体的に動き始めた。

開催地域の薬局に講師を依頼し住民との距離を縮める効果を狙う

副会長で当時の情報・広報委員会の責任者である川島一夫さんによると、同講演会を企画するにあたって、参加者のターゲットは高齢者とその家族を想定したそうだ。その理由について川島さんは「介護分野に薬局薬剤師が関わることによって、よりよい在宅療養が受けられ、薬剤師が頼りになる存在であることを住民に知ってもらうことは、これから薬局が介護事業を積極的に展開するうえで有利になると考えました。会費をもとに行う事業なので、会員薬局にもメリットがなければ理解や協力は得られないと思ったのです」と語る。

また、運営にあたっては、開催地域の薬局に講師の募集をかけることにし、情報・広報委員会は会場の手配などの裏方仕事に徹することにした。

「薬局の薬剤師に講師を任せれば地域の事情に精通している分だけ具体的な講演や相談が可能になり、参加する住民も知っている薬局の薬剤師のほうが親しみを持てます。互いの満足度が高くなると判断したのです」（川島さん）

さらに講師を引き受けてくれた薬局への特典として、自分の薬局の特徴や特色、力を入れて取り組んでいる活動などをPRする時間を設けた。これが意外にも好評で「次回、講師役を引き受けるときは住民にPRできる内容をさらに充実させるために、新しいことにチャレンジしたい」「住民のためにこんなサービスを提供したい」と、薬局のモチベーションの向上につながっている。

同薬剤師会では当初、地域の薬局が講師募集に応じてくれるかどうか心配したが、同薬剤師会が講演資料を作成し、講演内容の質を保証するとともに現場の負担を減らすなどの配慮をした結果、若手からベテランまで幅広い年代の薬剤師が積極的に手を上げ、講演会の回を重ねるごとに講師役を引き受けてくれる薬剤師が増えている。

「地域に貢献したいという薬剤師の潜在的なニーズがあることをあらためて実感しました。これまで薬剤師は内向きの活動が中心だったので、どのように外向きの活動をすればよいのかわからなかったのでしょう。地域薬剤師会がこのような機会を設けることは、薬局薬剤師の地域への関心を高めるうえでも重要なことだと考えています」（川島さん）

同薬剤師会では第１回目の講演会を開催するにあたり、ポスター（**写真**）を作成し、会員薬局の店内に掲示するほか各区の保健センターにも掲示を依頼。講演会にかかった経費は、ポスター作成費と講師の謝礼のみだ。会場は市が後援してくれたので、無償の施設を手配することができた。

薬の飲み方をお酒に置き換えるなど、生活に密着した視点で話す講師の解説は「とてもわかりやすい」と喜ばれている

掲示されたポスターを見て、保健センターの職員から「うちの区でも、ぜひ開催してほしい」といううれしい反応もあった

この活動を足がかりに薬局に公共性を持たせたい

このような準備を重ねて開催にこぎつけた同講演会は、冒頭で紹介したように地域の住民に大好評だ。同薬剤師会が実施した参加者アンケート調査によると、講演後に行われる「まちかどお薬講演会」で日頃の心配なことが解消したと回答した人は全体の93%に上っている。

「講演会が終了した後も講師の薬剤師と参加した高齢者の方が長い間話し込んでいる光景がどの会場でも見られます。講演会を通して地域の薬局と住民の距離が確実に縮まっていることを感じ、薬剤師会としても強い手応えを持っています。地域の薬局薬剤師が講師を務める意義は大きい」と話すのは現在、情報・広報委員会の責任者を務める笹部英士さん。

参加者アンケート調査には「お薬手帳を正確に記入し健康管理に役立てたい」（70代男性）、「かかりつけ薬局を１カ所に絞りたい」（60代男性）との感想が寄せられ、お薬手帳やかかりつけ薬局の重要性を理解してくれた住民も目立った。

「忙しい日常業務の中では、大切な情報だと思っても十分に説明することができません。その点、講演会では時間をかけてじっくり説明できるので、薬剤師が届けたい情報を確実に届けられる効果も大きい」と、川島さんは評価する。

また、「これから薬局を大いに利用したい」（70代女性）、「理解しやすい説明で大変よかった。もっと薬局に相談する」（70代男性）といった声も少なくなく、講演会を通して薬剤師や薬局の存在を十分にアピールできたこともわかる。

表　2010年度の「まちかどお薬講演会」の実績

日付	場所	内容	参加人数
4月10日	若葉区保健福祉センター	①お薬の正しい飲み方	20名
		②高齢者が薬を飲む時に大事なこと	
		③在宅介護と薬	
		④身近なかかりつけ薬局との付き合い方	
5月13日	花見川区マンション集会室	①薬の正しい飲み方	16名
		②サプリメントの上手な利用法とかかりつけ薬局	
6月27日	花見川区マンション集会室	①お薬の正しい飲み方	40名
		②高齢者が薬を飲む時に大事なこと	
		③在宅介護とお薬	
		④身近なかかりつけ薬局との付き合い方	
9月25日	あやめ台いきいきセンター	①お薬の正しい飲み方	26名
		②高齢者が薬を飲む時に大事なこと	
		③在宅介護とお薬	
		④身近なかかりつけ薬局との付き合い方	
9月29日	花見川区マンション集会室	①「老化の個人差について」	20名

「薬局が相談窓口になることを理解してもらえたのは大成功でした。店頭で患者さんから質問を受ければ薬剤師も病状などについて聞きやすくなり、日頃の服薬指導に生かせます。講演会は、薬剤師のやりがいや満足感を高める職場づくりにも役立っていると思います」（川島さん）

情報・広報委員会では、この２年間の活動の中で継続すればするほど薬局にも住民にも効果が高いことを実感していることから、この事業は何よりも継続性が大事だと考えている。そして、今後の大きな課題は講演テーマと対象者の拡大だとも。「来年度は30～40代の若い世代に向けて子どもや女性をテーマにした講演会を企画します。テーマを広げることによって、講師に応募してくれる薬局も広がっていくでしょう」（笹部さん）

現在、同薬剤師会の会員薬剤師は600人。見方を変えれば薬剤師が600人の講師をプールしているようなものだ。川島さんも「講演会を依頼してきた団体がテーマを自由に選び、市内のどこでも講師を派遣できるような体制を構築していきたい」と話す。そして、近い将来には薬学生の実務実習にもうまく組み込み、教育的効果を図ることも検討している。

一方、古山さんにはこの活動を足がかりに薬局に公共性を持たせたいとの狙いがある。例えば千葉市は政令指定都市なのに保健所が市内に１カ所しかない。336軒の薬局が保健所の出張所になれば住民は大いに助かる。

「そのためにも地域の狭い範囲で回数を重ねて、『まちかどお薬講演会』を開催し、薬剤師と住民との関係を親密にしていきたい。こうした実績を積み上げることによって行政も薬局が信頼できる相談窓口であることを認め、地域の中で重要な役割を任せてもらえるようになるのです」と、古山さんは意気込みを語る。

同薬剤師会は、地域における次のステップを着実に見据えながら、この事業をさらに充実・拡大させていく考えだ。